

# 中島保美鑄金工芸美術研究所

58歳から大学で  
教えることにしました

大阪市エクラートパークの  
金造運営にも携わっています

## 鑄金作家として活動中 湧き上がる思いを 形にしています

祖父、父が鑄金を手がけていたこともあり、自然と私も鑄金の世界に入りました。昭和20年後半～30代の経済成長期は家庭に鑄物の置物を置いたり、昭和40年代には企業が鑄物でできた干支の置物を販促品として配ったり。昔は、鑄金は日用品としての需要が多かったのですが、今では工芸品で、需要もかなり減っています。

以前から美術展に出展していましたが、現在は作家活動に専念させてもらっています。どんなに忙しくても、自然と作りたいたいという意欲がわき、作品作りで没頭してしまうんです。頭の中に浮かぶ形は、伸びやかで力強いものが多いですね。ただ気を付けているのは、金属は冷たくて固い印象なので、やわらかさを感じるフォルムを心がけています。

鑄金士 中島 保美さん

鑄金作家として活動中  
湧き上がる思いを  
形にしています



鑄造はいろいろな工程をふむ。  
時間もかかるし、  
その分、値段も高くなる

鑄造に使う砂は  
使い捨て

作る前の準備や  
手配もたいへん

鑄造するときは教え子や  
若い人にも  
手伝ってもらいます



## 祖父、父に継いで鑄金の道へ 有名美術展で何度も入選

日本最大の美術展である「日展」で入選36回、特選1回という受賞歴を誇る中島さん。祖父、父が鑄金士をやっていたので、小さなころから鑄金が身近なものだった。現在も鑄金作家として活動し、現代工芸展では審査員を務め、工芸展や美術展での出展も行っている。

中島さんの作品のテーマは「生命」。奥様が流産したときに、命というものはかなさを嘆き、自分の作品で生命力を表したいと思った。作品ごとに形は違うけれど、天に向かって伸びるパワーやずっしり根付いたフォルムなど、生命を思い浮かべる。さらに、「はるかなる明日香より」というテーマで作品作りも行っている。飛鳥時代のエネルギーやパワーに感じるものを表現している。

鑄金で使用する金属はブロンズ(青銅)のほか、真鍮、錫、亜鉛など。制作過程は、まず粘土で形を作り石膏に置き換えて原型を作る。砂で作りがあがった鑄型に溶かした金属を流し込み、冷やして鑄型をはずし、工具などで仕上げをして完成。複雑な形が多いので金属は手作業で流し込むが、かなりの重さがある。また、金属を溶かすには、たとえばブロンズでは1200℃といったものすごい温度。70歳の中島さんだけでは体力的にも厳しいので、同じく鑄金を志す息子さんがサポートする。

日本での鑄金の技法は、弥生時代にはすでにあり、仏具や香炉などを作っていた。奈良時代には、東大寺大仏も鑄金で作られている。その伝統ある技法を広く知ってもらいたいと中島さんは話す。

### 中島保美鑄金工芸美術研究所

〒544-0021 大阪市生野区勝山南3-11-3  
TEL・FAX 06-6731-1283

事業内容／鑄金での工芸品製作(金属を溶かして型に入れ固める鑄金の技術を用い、独自のテーマを掲げた作品づくりを行っている)

## 自宅の隣が工房です



昭和38年(1963年)に作られた「はるかなる明日香」の鐘は、今でも生野区役所の隣に展示されています。

生野区役所で見られます

飛鳥時代のエネルギーやパワーに感じるものを表現している

生野区のこのあたりは、鑄造の街だったんですよ



制作時間が多いので、作業に没頭する傾向があります。

生野区は鑄金の街です。昔は鑄金工場の跡地が多く、今でも鑄金工場の跡地を見ることができます。

58歳から大学の先生に！後進育成に意欲をそそぐ

58歳から大学の先生に！  
後進育成に意欲をそそぐ



Franklin D. Roosevelt  
1933年3月4日

中島さんは、58歳から定年まで大阪芸術大学工芸学科で学生に鑄金を教えた。担当したのは50名の金属工芸コースの学生。大阪市立クラフトパークのスタッフとして、企画運営から携わる。創作を志す若者の育成とともに、社会に出て仕事としては無理でも趣味として創作を続けたい方の力になりたいという中島さんの後進への思いが分かる。

我が社の自慢